

第 部 情報文明の歴史的展望

はじめに

本報告書の目的は、いわゆるIT革命がもたらすと思われる情報社会ないしは情報文明の、中長期的な未来 30年～50年後の未来 の姿を描き出してみるところにある。率直に言って、それは達成することがきわめて困難な目的であるが、あえて挑戦してみたい。

未来が見える魔法の硝子玉をもたないわれわれが遠い未来を予想しようとすれば、遠い過去から現在、未来にかけて、それ自体は変化していないと考えられる「変化のパターン」を発見もしくは想定し、それを未来に延長してみる以外にない。そこで、本報告書ではまず、人類の文明（および文化）の進化史的な分類を行い、その中での近代文明の進化過程を回顧してみることで、未来への展望をえようと試みるのだが、そのさいに、社会変化の基本パターンとしての“S字波”の仮説にもとづいて、さまざまなS字波の継起や複合という観点を徹底的に適用してみたい¹。そして最後に、幕末以来の日本の近代化についても同様な観点をあてはめつつ、それを“長波”の観点と重ね合わせることによって、日本の中長期的な未来像をも考えてみたい。

第1章：文明の分類

社会、主体、文明、文化の定義

まず、人間社会を、「文明と文化を共有するさまざまな主体（個人や組織）の集まり」とみなそう。ここで“主体”というのは、「さまざまな情報的および物理的な手段を使用して、世界を認識・評価しながら、自らの設定する目標の実現に努めている（限定）合理的な行動体」をさす。“文明”とは、社会を構成している諸主体の生存のための制度・装置群²、すなわち「諸主体が、意識的に構築し定型化している文物（知識、思想、制度のようなソフトウェアと、住居や各種の物財のようなハードウェア）の総体をさす。また“文化”は、

¹ そのような試みの先例として、公文俊平、『文明の進化と情報化』（NTT出版、2001年）をあげておく。本報告書は、この本の枠組に依拠しつつ、それをさらに展開しようとしている。

² 梅棹忠夫の、文明とは「装置群と制度群をふくんだ人間の生活システムの全体」だという定義[梅棹00-1]（26ページ）を参照。梅棹は、もともと生態系の一部であった人間が、巨大な脳とそれが行う精神活動を発達させることによって、人間=自然系というシステム（生態系）から、人間=装置・制度系というシステム（文明系）への移行が起こったという。

社会の成員が通有する暗黙知の一部であって、「諸主体が無意識的に維持し伝達していく、行為の選択・実行原理、ひいては文明の構築・運用原理（世界観や価値観）の総体」をさす。この意味での文化は、その担い手にとっては、あたかも人が呼吸している空気のような、通常は意識にのぼらない特質であって、注意深い反省を通じて初めて、その一端が自覚的に捉えられるにすぎない。

文明の分類基準

人間の社会には、過去にもまた現在も、さまざまな異なる文明が存在していると見られるが、ここでは、それらの文明の分類基準として、

- 1．技術（つまり主体の目標実現能力）の三つの発展段階、すなわち
採集・狩猟技術、農耕・牧畜技術、および軍事・産業・情報技術³
- 2．思想（つまり主体の世界解釈枠組み）の三つの発展段階、すなわち
呪術、宗教、および智識⁴
- 3．文化の二つの基本型、すなわち
思想面での突破力をもつ過去準拠・存続志向型文化と
技術面での突破力をもつ未来志向・発展志向型文化⁵

の三つを考えてみよう。そして技術面での突破力をもつ未来志向型文明を、どの技術段階への突破を達成するかによって、発達した脳が生み出した言語と道具を使用して採集や狩猟を行うようになる“始代文明”と、農耕・牧畜技術の開発に成功する“古代文明”、および軍事・産業・情報技術を発達させる“近代文明”の三つに分けよう。また、思想・宗教面での突破力をもつ過去準拠型文明は、どのようなタイプの思想・宗教をもつにいたるかに応じて、“呪術文明”、“宗教文明”、および“智識文明”の三つに分けることにしよう。

³ 一般には、採集・狩猟段階の後には、アルピン・トフラー流の、農業、産業、情報革命という技術革命の三つの波が続くと考えられている。しかしここでは、情報技術の発展は、産業技術や軍事技術と並ぶ、近代文明の発展させる技術の一つだという解釈を採用しておく。

⁴ ここでいう“呪術”(ないしアニミズム)は原始宗教にあたり、“宗教”はいわゆる高度宗教あるいは有史宗教といわれるものをさす。これに対して“智識”は、未来において出現してくると想像される、さらにより高度の思想ないし宗教をさしている。

⁵ ここでいう“過去準拠型”と“未来志向型”の区別は、たとえば岡田英弘が深い洞察に満ちた著作、『歴史とはなにか』(文藝春秋新書、2001年)の中で指摘している「歴史のある文明と歴史のない文明」の区別とは異なる。「歴史のない文明」の典型であるイスラム文明にも過去の記憶はあり、現在の苦境から脱する方途として過去の良き時代への回帰ないし復古が常に模索される。これが過去準拠型文明の中での人々の典型的な行動様式なのである。たとえば黒田壽郎の次のような指摘をみよ。「過去の伝統に現在の変革の道筋を模索するこの種の営みは、いまに始まったことではなく、歴史を通じて絶えず存在してきたものなのである。宗教なりイデオロギーなりある種の価値体系を信ずる者が、その実効性に衰えが生じた場合、その価値体系の枠組みの中で活性を取り戻す努力を行うことは、イスラームに限らず、どのような宗教、イデオロギーにおいても当然の試みである。イスラームだけが特別変わったことをしているわけではないのである。」(イスラーム教過激派は「法を越えた者」、文藝春秋10月緊急増刊号)

これによって、人類の文明はとりあえず六つのタイプに大別されたことになる（図1参照）。

図1：文明の仮分類図式

	技	採狩	農牧	軍産情
思				
智識				智識⇒
宗教			宗教⇒	近代↑
呪術		呪術⇒	古代↑	
	⇒	始代↑		

文明相互間の関係

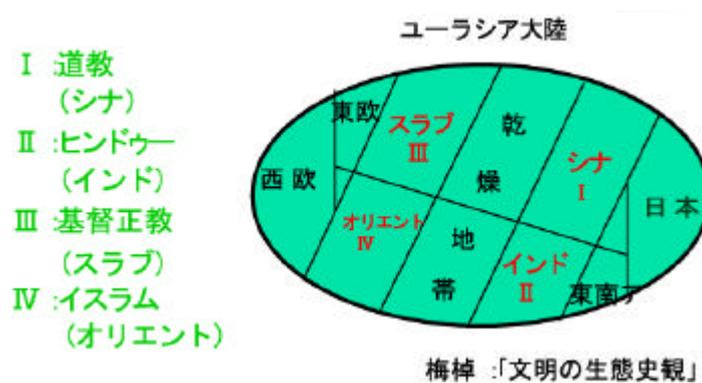
これらの文明相互間の関係については、次のような仮説を考えておく。すなわち、未来志向型（つまりは発展志向型）の文明は、技術面での不断の発展を達成するものの、いずれはその発展は内的・外的両面での限界に直面する。また、思想面では、先行する過去準拠型の文明の影響下から抜け出すことはできない。他方、先行する未来準拠型の文明が発展の限界に直面する頃に出現してくる過去準拠型の新文明は、先行文明が獲得していた個別の知識を統合してより高度な知の水準への突破に成功するが、いったん達成された高度の知的統合と突破は、そこで固定されてしまう。とりわけ、技術面での発展は、事実としてはともかく理念としては、むしろそれを抑圧しようとする傾向が強く、技術面での主要な突破を達成することはできない。こうして過去準拠型（つまりは存続志向型）の文明は、比較的早く、社会的統合の弱化や衰退に向かうが、そこから逃れる途は、理念的には過去への回帰ないし再出発 “復古” や “維新” あるいはシナ文明における “易姓革命” 以外にありえない。⁶

さらに、梅棹忠夫の『文明の生態史観』（中央公論社、1957年）以来の分類を踏襲して、ユーラシア大陸の宗教文明を、現在どのような宗教がそこで支配的であるかに応じて、オリエントの “イスラム文明”、インドの “ヒンドゥー文明”、シナの “道教文明”、スラブ

⁶ もちろん、現実の問題としては、自らの衰退を後目に台頭してくる未来志向型の新文明が生み出す軍事や経済面の技術に魅せられた過去準拠型文明の中に、新文明の一部を採用しようとする試みが出現することは十分にありうるだろう。その過程で、たとえば今日の東南アジアの諸国に ことによると中国にさえ みられるような、いわば “文明の転換” とでも呼ぶことが適切な社会変化さえ発生するかもしれない。しかし、そのような文明受容の試みがつねに成功するという保証はない。むしろ、その失敗の中から、あらためて復古に向かう “原理主義” 的な動き、新文明を異教として排撃したり、新文明の影響下にある自文明内の勢力を異端として攻撃したりする動きが出てくる可能性も、決して小さくないだろう。

の“キリスト正教文明”の四つの主分枝に細分しよう（図2参照）。⁷ また、近代文明の主分枝としては、梅棹のあげている日本（および東・東南アジア、つまり西太平洋）と西欧（および東欧、つまり東大西洋）の他に、アメリカ大陸をも加えて、合計三つを考えておこう。⁸

図2：宗教文明の四大分枝



これに対し、『文明の衝突』（原著は1996年出版、邦訳は集英社、1998年）で知られるサミュエル・ハンチントンは、文明を七つないし八つに区分している。すなわち、中華、日本、ヒンドゥー、イスラム、西欧、ロシア正教会、ラテン・アメリカ、（およびアフリカ）の八つである。ハンチントンは最初1993年の夏に発表された『フォーリン・アフェアーズ』誌所収の論文では、中華文明の代わりに儒教文明という名称を採用していたが、その後より宗教的意味合いの少ない中華文明という名称にあらためた。だが、その是非はともかくとして、彼の言う中華、ヒンドゥー、イスラム、ロシア正教会文明の四つが、本報告書にいう宗教文明の四つの主分枝に対応していることは明らかである。他方、彼は、アメリカ（北米）を西欧とひとくくりにして、近代文明＝西欧文明とする解釈をとっている。そのため、ラテン・アメリカと日本は、非近代文明の範疇に入れられてしまった。彼はラテン・アメリカを近代文明の一分枝と見る通説は採らないで、ラテン・アメリカはヨーロッパ文明から生まれたにもかかわらず、その後独自の発展経路を歩んだと考えている。また日本文明は中華文明から派生したものであるが固有の文明として発展したとみなしている。そればかりか、日本文明は孤立した単独の文明だから東アジアでの文明の中心に

⁷ 梅棹は、ユーラシア大陸の両端にあたる西欧と日本に、それぞれ独自に“近代文明”が生まれて発展してきたと考えている。そのさらに周辺部にあたる東南アジアと東欧が、近代文明に歩み入ったかについては、判断を留保しているように思われる。本報告書では、どちらも近代文明の亜分枝だとみる立場を取る。つまり、イスラム教国のマレーシアやインドネシア、あるいは仏教国のタイは、インドや中国の沿海部などと共に、今日では近代文明に移行しつつあると見る立場を取る。

⁸ つまり、いわゆるラテン・アメリカ地域も、ここでは近代文明のアメリカ大陸主分枝の中の一亜分枝だと見る立場を取る。

なることはありえないとしている。今後の東アジアは、中国系の人々を中心とする経済統合に向かうだろうというのである。⁹ しかしこのような日本解釈は、とうてい容認できない。少なくとも日本の文明研究者のほとんど全員が、梅棹流の日欧並行近代化説を受け入れているかどうかはともかく、今日の日本文明を広義の近代文明の一分枝とみなす立場を取っていることは、疑いようのない事実である。

近代文明は、“近代文化”に支えられていると考えられるが、その特徴は、一言で言えば“合理主義”、より詳しく言えば“進歩主義”、“手段主義”、“自由主義”の三つにある。¹⁰ 今日の日本文化の中に、これらの“文化子”がどこまで深く埋め込まれているかについては、議論の余地があろう。しかし、それらが今日の日本文化の一部をなしていることについては、大方の日本人は疑いをはさまないのではないか。もちろん、後述するような近代文明の成熟過程で、これらの価値観の有効性に対しては疑問や反省が見られるようになってくることは事実である。しかし、それは日本だけに限ったことではない。¹¹

第2章：社会変化を捉える枠組み S字波 と文明の交替

ここで、社会変化の性格を把握する上で、比較的高い普遍妥当性をもつと思われる概念的な枠組みを紹介しておこう。それは、“出現”、“突破”、および“成熟”という三つの局面をもつ、“S字波”の枠組みである（図3参照）。

⁹ Samuel P. Huntington, *Cultures in the 21st Century: Conflicts and Convergences*. Keynote Address, Colorado College's 125th Anniversary Symposium, Feb. 4, 2001.

ちなみにハンチントンはこの講演の中で、米国文明の背景にある文化的多様性を指摘すると共に、米国社会の統合は、これまでは憲法に記されているような政治的イデオロギー（自由主義、民主主義、市場主義等）によって維持されてきたが、イデオロギーの終焉が文化による統合の重要性を増大させつつある現代のような時代には、米国といえども文化による統合を重視せざるを得ず、そのためには、米国建国の父祖たちが共有していた西欧文化をその中核に置く以外にないと強調しているが、これもにわかには首肯しがたい。むしろ、たとえば今回のようなテロリスト、あるいは近代文明の否定者たちとの対決を通じて、これまで通有されてきた政治的イデオロギーが内面化され、“文化化”されていく可能性の方を、より重視してしかるべきではないだろうか。

¹⁰ これとの対比で言えば、宗教文明の基盤をなす文化、すなわち“宗教文化”の特色は、“権威主義”という言葉で総括できよう。また、その主要な三つの柱としては、“正統主義”、“目的論”、“戒律主義”の三つをあげることができそう。

¹¹ とはいふものの、ハンチントンに代表されるような米欧の論者のもっている日本イメージと日本人のもっているセルフ・イメージとの間には、大きなギャップが存在しているという事実自体は否定できそうもない。